

藤馬龍太郎会誌

発 同志社大学法学部「藤馬会」事務局
行 〆 (0774) 24-9244

第13号

新のおとし子

2002年10月 (題字・藤馬龍太郎筆)

年会費(1500円)の振り込みは…
口座名:同志社大学 藤馬会 藤馬雅仁
みずほ銀行 出町支店 普通 1538207
郵便局 14430-1-1121441



首相公選制議論に思う

同志社大学名誉教授 藤馬龍太郎

最近、首相公選論がまた騒がしく議論されている。これはかつて一九五六年頃、当時自民党の若手議員で血気盛んな七人の侍の一人といわれて国民的人気も高かった中曽根康弘氏が「恋人と首相は自分で選ぶ」というスローガンで首相公選論を提唱したのが始まりである。鳩山内閣の末期に内閣に憲法調査会が設置された。その委員となった中曽根氏は「内閣総理大臣を公選にして全国的スケールで選出」、国会は三権分立のアメリカ的国会とする」と憲法調査会第22回総会で述べて首相公選制中曽根私案を提唱したのであった(議事録四一頁以下)。あれから四十数年経って、いま再びこの議論がホットに再燃しているというわけである。

この中曽根案に関しては、私にも、にがてに甘酸っぱい思い出がある。私は、当時国立国会図書館の調査立法考査局政治行政課の一員であったが、幾度となく中曽根氏に呼ばれて議員会館の彼の部屋にいき、首相公選制の構想を聞かされ、自分の公選論について憲法上の問題点や、憲法改正を必要とするならば、どこをどう改正すべきか、調査・研究して文書に取りまとめてほしいとレファレンス(調査)を依頼されたものであった。正直言って私は、中曽根氏の政治スタイルや政治理念には全く共感するどころか、反感すら感じていたのであるが(元首相、自民党の元老的存在として、老練の身で小泉政権のご意見番を自任し、たった一人「大敵位」という敬称で得意気な現在の彼には益々もって……)、なにせ国家公務員として、とりわけ国会議員の立法活動の補助という役割をもつ調査局の一員としては、気の進まないまま公務と自分についていかにして何かが夜を徹して調査書をまとめた。あれこれを持参して中曽根議員の強引でねばり強い一問一答に答えを強いられた辛い思い出がある。写真にある新書版は、彼の『首相公選論の提唱』を中心に、これに対する賛否両論を収載したものである。本書には、恩師田畑忠生先生の反対論首相公選制についてでも収められている。いわば現在の首相公選論の原型ともいえるもので、当時広く読まれたものであった。写真のもは、そのときの協力を謝して中曽根氏から私に贈られたものである。ある秋の一日、私たち政治行政課のメンバーで二泊三日の旅行をしたことがある。熱海から箱根の湖に向かっていったとき、絶景の素晴らしさの十国時にさしかかったとき「首相は国民投票で選ぶ」と書かれた約五〇センチ角の木の柱が不意に建っているのをバスの中から発見して、素晴らしい景観を台無しにするこの無神経さに、みんなで呆気にとられたこともある。若き日の思い出である。(全国に三七本ものこの柱を建てる運動も中曽根氏が行ったもので、早稲田の学生が中心になってやってくれたおかげで……)。後掲小田金宏編二頁に中曽根氏みずから述べている。

若問題がしい現代の首相公選論は、一九六〇年代の中曽根案とは全く別個の理論的主張のものもあることに注意する必要がある。憲法を改正して議院内閣制を廃止し、アメリカのような大統領制に近いものを採用すべしと主張する中曽根案(中曽根『首相公選論』小田金宏編首相公選論で日本は変わる「角川書店」二〇〇一年所収一九九頁以下)と異なり、議院内閣制を維持しつつ、従って衆議院による内閣不信任権と内閣による衆議院の解散権の存在を前提として、そのうえで首相の公選を導入しようとするものもある。今年八月七日、小泉首相の私的諮問機関「首相公選制を考える懇談会」(座長・佐々木毅東京大学長)は、①大統領制型 ②議院内閣制型 ③憲法の枠内での改革案という三案を単に併記しただけに過ぎない報告書を提出した(八月七日朝日新聞朝刊)。

私はここで首相公選制を批判するつもりはない。またこの問題を詳細に論ずることも紙幅の関係で不可能である。ただ、この日の朝日紙のコメント「前田直人氏によるリットとアイロニーのきいた次のコメントは、適切なものとして私も全く同感である。いわく、首相公選制は「憲法改正という高いハードルに加え、事実上の、公選首相」といわれる小泉首相の存在自体も足を引っ張った。実現の可能性はむしろ遠のいた」と。小泉政権のこの一年半

余りが物語っている通り、日本の政策決定の欠陥は、首相の選び方にあるのではない。リーダーシップをめぐると党内の抵抗勢力との膠着状態は、制度の問題というよりは自民党という「政党」の問題である。

「日本の与党による統治システムの限界が小泉さんのおかげで非常にはっきりしてきたといえる」(山口二郎北大教授)という指摘もある。現在の、派閥政治の跋扈、極端な政争や政局の不安定、つまり過去一〇年、宮沢喜一氏から小泉氏まで首相は八人、この間、内閣の交代や総選挙に伴う組閣は九回、内閣改組は六回、首相の平均在任期間は一年三ヵ月、閣僚はさらに短命平均一年前後という(二〇〇二・九・一三朝日紙)。

中曽根氏のいう「現代の日本の議院内閣制では何が問題か」というと、総理大臣と国民の間国会というある意味で中間地帯があり、国会で国民の意思とは離れてさまざまなことが行われ、あるいは汚職が起り、あるいは権力争奪戦が起る

など起っていることである」(小田前掲書二頁中曽根首相公選論原案)という発言。神に託して解釈、運用して行くことがその大切である内閣制という制度に由来する問題なのではない。自明の理ながら、憲法事項を空

洞化するのではなく、議院内閣制を正しく、憲法の精神にそって解釈、運用して行くことがその大切である内閣制という制度に由来する問題なのではない。自明の理ながら、憲法事項を空

「あんなクサイもん死んでも食べへん」と公言してきた私が、四十三歳になった今年、納豆を食べるようになった。これには自分も家族も驚いている。

食へ始めた直接の動機は、看護師でもある親友の強い勧めである。

極度の肥満症で、尿酸の塊のような私の血はドロドロで、このまま放置すると血栓ができて確率が高い。納豆には高栄養価、高消化吸収性、抗菌性という長所に加え、血栓を溶解して血液をサラサラにする効果がある。これは、おいのもの一つ、脂肪酸を抑える独自の

あるので、特に夕食時に納豆を摂取すべきというのである。就寝中は汗をかき、血がドロドロになりやすいので、それを防ぐためという。何とも言えない口の中のはねは感と噛み砕いた大豆の細粒によるぐにぐに感とも必死で戦い、それを一週間克服した。

現在、アンモニアの発生が少ない納豆菌を使った「においひかえめ」の「なつこいち」レベルにまで進んだ。独特の風味をおいしく感じるようになってきた。

おれに「なつこいち」

見された糖尿病もどうやらおかげ様で血糖値も平常値に近くなりました。鬼の攪乱、と自嘲し、憫笑しつつも、いまではかつてのよう

に好きなものを饕餮食へ、深夜二時、三時の不衛生な生活からも脱却して比較的規律正しい生活を送っています。ただ法学部の同僚で、気を許さない、心交わしあえた数少ない「心友」の一人、しかも私より十三歳も若い労働法の安枝英伸教授の急逝(昨三月二十七日夜、新幹線車中)による寂寥感からはいまだに脱し切れなっています。『週無空過者』であつて空しく過ぐるもの(な)をしみじみと実感しています。

藤馬会のため、尽きせぬお力添えを頂いた役員の方々に、会員の皆さんに心からの感謝を申し上げることに、一層のご健勝を切に祈念いたしております。

をいれお箸でかき混ぜてねばねばにする。その上に卵の黄身だけを落とし、刻みネギを多目に入れ、うすくち醤油を垂らし、軽やかに混ぜて、熱いごぼんの上に掛けて煩張る。おいしい。毎日のように食べている。体調もいい。

少し古いが、九十五年のデータによると、京都・滋賀では五十七、和歌山五十、兵庫・大阪三十六の子供が家庭で納豆を食べる経験を持ち、納豆を習慣的に食べている人は関西人の四十八、納豆文化の裾野は広がっている。

関西人各位「におわなつこ」から始めてみませんか?

シジュウサンニシテ

西谷久繁(78年度生)

納豆菌を使った商品である。確かにあまりクサイくない。薬だと思って特訓した。薬味や味付けもいろいろ試した。何とも言えない口の中のはねは感と噛み砕いた大豆の細粒によるぐにぐに感とも必死で戦い、それを一週間克服した。

現在、アンモニアの発生が少ない納豆菌を使った「においひかえめ」の「なつこいち」レベルにまで進んだ。独特の風味をおいしく感じるようになってきた。

おれに「なつこいち」



。と言いますのも、坂本健をはじめとするチームで立派なホームページを作って頂きました。そのなかには「龍の落とし子」に関する意見も頂きたいのです。会員の皆様は、藤馬先生の話を始めたこともあり、一昨年のオリンピックのソフトボールには気合いが入りました。あの速い球、絶対打てません。手元で上にあるのかと思えば、次の球は手元でドロップのように一だのちよっとカッコイイちゃんですよ。それが、日本人集まるとあれほど日本津かす集団になります。是非藤馬会会員も、日本を沸かすくらいに集団に登りて行きたいものです。